

吉澤誠一郎著

『天津の近代』

——清末都市における政治文化と社会統合——

貴志俊彦

著者は、二〇〇〇年五月東京大学で学位を授与された博士論文「清末天津における政治文化と社会統合—中国近代都市形成史論」を基礎として、本書を上梓された。本書の刊行は、著者とともに天津地域史研究会の発足に携わり、この九年間その運営に携わってきた者の一人として、誠に感慨深いものがある。まずは、氏のこれまでの真摯なる研究姿勢をたたえ、この労作に賛辞を贈りたい。

思えば、この二〇年近くの中国近現代史研究をめぐる変化は著しいものがある。著者が大学院時代本書の原基を構想し始めたとき、日本の中国近現代都市史研究は参照すべき先行研究が決して多くはなかった。そのため、欧米の都市史研究、前近代中国都市史研究の諸成果を参考にし、また著者の師である濱下武志氏の朝貢貿易論、岸本美緒氏らの明清地域史研究の成果に学ぶことから始まった。ところが、本書でも多用されている『大公報』などの新聞史料が復刻されて、一九八〇年代中葉以降日本でも閲覧できるようになり、このことが中国都市史研究を進める最初の原動力となった。

さらに、一九八〇年代後半には、中国各地の都市を実見調査することも不可能でなくなつたし、中国への留学ブームもおこつた。一九九〇年代になると、今度は台湾、中国とも公開された文書史料は直接閲覧できるようになり、またインターネットの普及で欧米の史料館についての情報も容易に入手できるようになった。これら一連の出来事によって、中国史研究に対する問題関心のあり方や手法が大きく変化した。このような学問上の変化は、たんなる「革命史観」からの離脱、「民国史研究」の再評価というにとどまらない。それは、東アジア史研究再構築とでもいべき変化をともしない、今日では明治以来続いてきた日本史、東洋史、西洋史という歴史学の枠組みさえ揺るがすような地殻変動が起こりつつあることを感じずにはいられない。少なくとも近年の日本における中国都市史研究の隆盛は、こうした研究潮流のなかで捉えることが可能と思える。

本書は、こうした研究潮流の精髓を端的に表現しているといつても過言ではなからう。すなわち、今日の研究者が共有しているところの、近代像の再検討、西欧的な歴史観からの解放、ナシヨナルヒストリーを自明の前提としない中国史研究、アイデンティティ研究の重要視、ウェスタン・イムパクト批判の再検討、地域的要因と国際的契機の相互関連の考察、そして交叉する各国語の多様な史料群など、そうした息吹を感じさせる記述が散見される。本書においても記述されているように、著者自身が議論するうえで、とくに留意している点は次のような前提である。すなわち、近代に対する捉え方として、『伝統』の連続性の強調も、『近代』の普遍性の指摘も不適切であり、一九世紀以降の歴史的経験

そのものによって説明されるべき」であり（六頁）、「予定調和的な市民社会論や「民主化を前提とする」理念的な議會政治観」も否定することで（二二頁、「」は評者注）、「近代化」として目的論的に考えられてきた歴史過程が、実は地域的要因と国際的契機の相互作用によってもたらされたことを丁寧に実証し（七頁）、「後世の歴史家の価値観に基づく「評価」論の一面性に再考を加えることができるかもしれない」（二八二頁）と考えていることである。これは、これまでの歴史学で常套句として使われてきた「近代化」、「帝國主義」、「ナショナルリズム」、「市民社会」という歴史学フレーズによって看過されてきた、一九世紀中葉から二〇世紀初頭における都市の政治文化の実相に迫ろうとする試みである。なお、著者は、政治文化というフレーズに「社会で暗黙裡に共有されている政治に対する考え方、感じ方、行動のしかたの複合的産物」との定義を与えている。

本書が、こうした時代を代表する論点、手法を随所に散りばめながらも、下記の構成からうかがえるように、とりあげるテーマは、アヘン戦争、天津教案、義和団、「新政」、反米ボイコット運動、辛亥革命といった戦後の中国近代史研究にとつてオーソドックスなものであり、著者が頑として真正面からこれらの問題に立ち向かっているところに、その堅実かつ禁欲的な研究者魂を感じずにはいられない。つまり、こうした「伝統的」なテーマの合間をぬって歴史学の新奇な問題を拾い集めている研究者からすれば、本書は先の革新的な「宣言」にもかわらず、まことに正統な人文学研究のスタイルを貫いていると指摘できるのである。

評 書

以下、本書のテーマである清末の天津における政治文化と社会

統合の歴史的变化についての解釈が、いかなる手法で論述されているのか、簡単にまとめてみたい。なお、本書は、全九章に補論をくわえ、それらの配列を三部構成のなかで位置付けている。この三部とは、次のような整理となっている（一八一—一九頁）。第一部「一九世紀中葉以降、地域防衛のための実践とその背後にある価値観が社会統合に大きな意義を有したことを強調する」、第二部「二〇世紀に入つてすぐの行政機構の革新と社会管理の問題を議論する」、第三部「愛国主義の発揚と社会統合のかかわりを扱う」。本書は、都市下層民を視座におきながらも、地域秩序が社会管理、行政管理によつていかに維持され、変容したのか、そうした変化のなかでアイデンティティがいかに変化したのかを全体のモチーフとしている。

第一部 地域防衛を支える価値観と記憶

第一章 団練の編成／第二章 火会と天津教案／第三章 光緒

初年の旱災と広仁堂／第四章 義和団支配と団練神話

第二部 行政機構の革新と社会管理

第五章 巡警創設と行政の変容／第六章 「捐」と都市管理／

第七章 善堂と習芸所のあいだ

第三部 愛国主義による社会統合

第八章 「抵制美約」運動と「中国」の団結／第九章 電車と

公憤——市内交通をめぐる政治／第一〇章 体育と革命——

辛亥革命時期の尚武理念と治安問題／補論 風俗の変遷

以下、著者自らが提起した四つの論点をもとに整理してみたい。

① 政治参加と公共性の展開

管理論で展開されている。

② 社会管理の進展

近代性の一側面が社会管理と不可分であること、これが本書で強調されている点の一つである。まず、アヘン戦争以降編成された団練をとりあげ、これを地域主義の温床とみる従来の見解や、ウィリアム・ロウが指摘するような「自律的な機能単位として都市自治体が在地の社会意識の中で確立した」とみる見解に検討を加える。本書における団練の重視は、団練がけつして地域を一枚岩に統合するものではなかったこと、そしてそれが地元の地域防衛のためだけでなく、北京における王朝護持の政治的主張である全国的な政治動向との相互作用の結果として表出していたことに注意する（第一章）。

つづけて、一八七〇年の反キリスト教暴動において火会という消防組織が中核的役割をはたしたことを欧文、漢文史料から明らかにしたうえで、宣教師たちの活動が従来の社会統合と権威を担う地元有力者との間で、善学をめぐる競争関係にあったことを明らかにする（第二章）。こうしたアヘン戦争後における排外主義の地域的記憶は、第四章でとりあげる義和団事件（著者は小林一美流に義和団戦争という用語を使用している）の伏線の一つとなる。

また、つづく一八七〇年代の大旱魃によって、地域の安寧を図るため、社会救済事業の実施が緊急課題となった。第三章では募婦のための施設である津河広仁堂、第七章では貧民対策の教養局、囚人用の游民習芸所、そして広仁堂女工廠、育嬰堂を事例として

著者によれば、都市における公共性の展開とは、「地方政治の構造の中に、ジャーナリズムや商会なども参加してゆくなかで、みずから「公」であると主張する発言主体・政治主体が増え、複雑な離合集散を示しながら相互に自己主張しあう状況がうまれること」であると定義づけられ（二二頁）、近年盛んに議論されている「公共性」論そのものには慎重に距離をおいている。

著者は、こうした公共性について、本書のキーワードの一つである「風俗」という用語で解釈しているように思える。これが本書で特に第五章、そして補論で、「風俗」を取りあげている意味だろう。著者によれば、「風俗」とは「社会秩序のありかたに関係する人々の行動の様態を概括的に指す語」（三六三頁）と定義されており、たんに各地固有の習慣だけでなく、理想とみなされた醇風美俗をも包括しながらも、中国史上の特徴としてこれが「よき統治者が人民を善導するという観念と結びついている」（三六四頁）ことを強調している。このうづろいやすい「風俗」を、文教、暴力、祭祀、義拳などから検証し、これが二〇世紀初頭に導入されたジャーナリズム、警察、学堂などの主体によって変化させられるプロセスを忠実に跡づけるとともに（補論）、本書全体にわたって、新たに成立した発言主体・政治主体が発する言説、例えば「大公報」「申報」「閩報」「庸報」など掲載の「社説」「論説」や「投稿」「記事」を重視し、それらに地元志向の社会的・政治的活動を見出すという手法をとっている。こうした公共性の展開は、民に訴えかける主体を増加させ、さまざまな世論、政論を作り上げる。一方、政権主体は、いかにこれを管理・統制するかという課題を抱えることになり、これに対する方策が次の社会

とりあげる。著者は、これら救済施設が、貧民救済とともに教化取締りの機能を備えるものであったこと、さらに職業教育の場を提供していたことに特徴を見出し出している。さらに、看過できないのは、こうした救済機関の変化が当時の理想的な社会を作るために必要とされる価値理念の変化をも表出していたという指摘である。こうした事例研究は、近代中国における社会救済と教化という両側面をもつ事業の地域的特徴を検証するとともに、近代の社会福祉事業成立に関する比較論を考察するうえでの一助となるだろう。もちろん、著者が課題としてあげているように、収容される民がこうした救済施設の変化に対していかなる声を発していたのが今後の興味を引くところである。

さらに、第四章では、一九〇〇年天津でおこった義和団の活動がもつた歴史の意味について考察する。本章は、これまでジョセフ・エシエリック、佐藤公彦両氏の間で展開されている山東の義和拳の起源について究明するのではなく、都市における義和団の活動実態を通じて、官治と社会秩序の性格を議論する。本章の考察においてとりわけ注目すべきは、天津の義和団が都市の下層民を吸収しながらも、南方出身者、外国人、回教徒などを敵視し、それまで潜在的／顕在的にあった都市社会の断層を露呈させたこと、そして義和団は先の反キリスト教運動の記憶から教訓やイメージをよみとろうとしていたという点である。

この義和団事件をへて、都市エリートは王朝体制の秩序を自明の前提としなくなり、さらにその後二年間の八カ国連合軍による都統衙門支配時期をへて、新たな秩序化が図られた。それは、「新しい『文明』をめざす方向」であり、「新式の学校教育を受

け、巡警の保護統制下で暮らす都市民の社会をめざす方向」であった(一八九頁)。新たな都市行政の導入に対して、著者はとくに都市行政の歴史的変遷のなかに巡警を位置づけ(第五章)、つづく第六章では民衆統制の実相を附加税である「捐」をキーワードとして明らかにする。すなわち、巡警が都市雑業層までを包括的に管理・統制する新たな武力装置として導入されただけでなく、「捐」もまた街路の物売り、人力車夫、娼妓など都市下層民に課すことで一種の統制の手段になったというのである。興味深いのは、都市雑業層からすれば、「捐」を支払うことで同時に自らの営業を合法化できたという指摘である。これは①で述べた公共性の展開ともリンクする議論である。

③ 国民意識の深化と帰属意識の再編

著者は、近年論争的局面をみた「チャイナユキ中国人性」を意識してか、「中国人」という帰属意識がいつ、どのようにして形成されたのかについて、次のように考察する。まず第三章では社会救済事業の推進過程で南方出身者と北方出身者の対立、そして両者の調整があったことを浮き彫りにし、第五章の義和団事件の議論ではむしろ両者の矛盾が顕在化したことを明らかにする。こうした地域差によるアイデンティティの違いを超えて、「中国人」という意識が芽生える契機として、第八章で述べる反米ボイコット運動をとりあげる。このような「中国」のための団結という観念は、ジャーナリズムの宣伝によって普及していき、慣習、出生地による対立を越える都市共生の論理としての「中国人」意識を登場させたとする。第九章でも、ベルギー資本の電車経営に対する反対運動に

において、都市住民の「公憤」という観念が、愛国的な「中国」を旗印とした運動に利用され、「中国」という意識がローカルな政治に埋め込まれて発露したことを明らかにする。しかし、著者も指摘するように、こうした「中国」という表象は、単純にナショナル・アイデンティティへと収斂したわけではなく、新たな社会層として生まれつつあった特に都市型エリートに共有されたと考えられることである。その典型的な事例が、第一〇章でとりあげられる体育社である。体育社は、「尚武の精神」を発揮し、「国」を強くするために組織された。ただ、この体育社、そして商団、天津紅十字会のような紳商主導による自衛的な武装組織は、辛亥革命、そしてつづく壬子兵乱の際、地域秩序を担うにはあまりに無力であり、愛国主義や治安維持の観点からみれば、袁世凱のような強大な権力者の存在が希求されたのかもしれないと述べる。このことは、とりもなおさず地域利害が愛国主義に結びつくとは限らないことを示唆する。

④啓蒙と民衆文化

文化変容と社会秩序の関係を考えるにあたって、文化統合のありかたの変化を跡付けることは重要である。この論点は、①でとりあげた「風俗」を考察するうえでの論点と重複するが、本書が清末に民間信仰や民衆反乱から、反迷信運動、啓蒙運動への変化の胎動を求めていることは再度強調しておきたい。義和團運動を支えた民間信仰に対して、新しく設置された学堂や、文盲を対象とした宣講処、閲報処など教育やジャーナリズムの発達はこれに對抗するも感性をはぐくむ機能を果たしたのである（例えば第八

章「補論」。

以上、本書は、都市社会の変動を仔細に追い、とくに紳商層が組織する自衛組織を一つ一つ丁寧にとりあげ、その組織、成員、資金、背景を丹念に明らかにしながら、理念先行的な「帝國主義」や「近代化」、「愛国主義」の具体的実像に迫り、その中身を詳細に検討した。同じく天津史を研究している評者として実感できることであるが、このことは、とくに史料面から考えると、それほど容易なことではなかったはずである。評者がかつて陳克論文を翻訳する過程で、ウィリアム・ロウの漢口研究に匹敵する天津都市社会論を企図したことがあったが、これは成功しなかった。これに比べて、著者が、これまで一貫したテーマを抱き、中国、台湾、イギリスでの海外での研究活動の成果をふんだんに盛り込み、本書を公刊したことは、まこと敬服するほかはない。

各章は、すべて既発表論文をベースにしており、多岐にわたる論点には共感を覚える。評者は、これまで著者の既発表論文のうち数編を論評してきたので、最後に以下3点に限り言及しておきたい。

①書名「天津の近代」について。博士論文の題目ならば十分納得できる内容だが、著者が清末の都市社会の変容過程を丁寧に追えば追うほど、この書名には違和感を感じずにはいられない。歴史書を販売するうえで、やむをえない出版社側の意向があつたとはいえ、清末を語ることで「近代」を語り尽くせると勘違いさせるような書名はいただけない。著者自身が「五四運動のときに（中略）、治安維持の必要と愛国主義の願望が激しく衝突する局

面に他ならなかったのである。中華民国北京政府時期の都市が抱えていた課題の一端が、ここに示されていると言えよう」(三五五頁)と指摘するように、本書で明らかにされた愛国主義と治安維持との相克、「中国人」としてのアイデンティティ形成過程の葛藤、戦後直後まで残存する租界を含む都市管理の矛盾、都市の繁栄と民衆文化の展開は、その後の歴史過程においても繰り返し表出される問題であり、清末に自己完結した問題ではないからである。

②「政治文化」あるいは「風俗」について。著者によれば、政治文化、それを象徴する「風俗」は、すでに述べたように本書のキーワードであるが、著者のまなざしが都市下層民に向けられているがゆえに、一九〇〇年以降急増していく彼らに政治意識や政治感覚、政治活動を見出すことが可能かどうか、疑問もでてくるもちろん、この場合の「政治」なる概念をいかに捉えるかという定義の問題にかかわるうが、人間や組織の活動がすべて政治的であるといえないことはもちろんのこと、彼らにある種の政治性を見出すまなざしが、皮肉にも著者が自明の前提として否定する「近代」から発せられているように思えるが、いかがなものであらうか。

③天津の都市空間の全体性から。本書が対象としているのは、ほぼ天津の華界であり、本書でとりあげられたさまざまな事件が、八カ国租界の華人であれ外国人であれ、租界の住民にどのようにつまえられ、意識されていたのかについての言及が乏しい。天津という都市の変容過程をみるならば、華界、租界を包括した都市社会を全体的に考察する必要があつたらう。でなければ、条約開港

地であり八カ国租界をもつ天津の都市社会を特徴的に捉えられるのが疑問である。天津が租界の設置を契機として拡大し、都市化することをふまえ、なおかつ博士論文の原題に「中国近代都市形成史論」という副題がついていることからすれば、租界についてもつと言及すべきであつた。巻末の参考文献には挙げられていないが、著者、評者を含めて共同で執筆した天津地域史研究会編『天津史——再生する都市のトポロジー——』(東方書店、一九九九年)では、著者自身が租界に関する章を担当したが、この章でもって天津の租界史研究が十分だったとはもちろん考えていないだろう。評者は、大陸などに日本を投影したイメージを適用させることで都市社会を描こうとする手法には批判的であるが、同時に中国史研究者が華界だけを注視して都市像を描くことにも問題があることを指摘しておきたい。評者自身は、都市空間全体から都市社会のダイナミズムを解読する手法こそ、東アジアの初期都市化過程論を考察するうえできわめて重要な手法だと考えている。

④天津都統衙門の統治の評価について。かつて評者は、著者から東洋文庫にフランス語で書かれた都統衙門文書が所蔵されていることを教えられた。天津の華界の都市化において、この都統衙門が統治した二年間は重要な転機であつたことは、先行研究でも指摘されているし、本書でも言及しているが、これまでその実態を全面的に論じたものはない。過大な要求であるかもしれないが、本書はやはり都統衙門の都市管理について一章をさくべきだと思ふ。この二年間こそが、清末天津の「風俗」が劇的に転換する契機であつただけに、なおさらそう考える次第である。

ともあれ、本書は、とりわけ後学の若い研究者に中国近代史研究の課題や手法について多くのことを示唆してくれることだろう。著者が、古巣である東京大学に戻られて本書のような都市史研究の成果を刊行され、今後はそのスタッフの一員としてどのような斬新な成果を生み出すかを楽しみにしたい。また、著者が今後、後進の研究者に發揮するであろう教育手腕についても心より期待を寄せるものである。

以上、はなはだ拙い書評であるが、著者の今後の研究、教育活動へのエールを贈る意味で論評させていただいた。なお、評者の理解の及ばない点に対しては、著者の寛容な心でもってお許し願いたい。また、本書を手掛かりに天津史を研究されたいという方に対しては、貴志俊彦・劉海岩・張利民編『天津史文獻目録』（叢刊別輯二三、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文獻センター、一九九八年三月）を紹介させていただく。

① 拙稿「中国都市史研究的課題及其尋求的理論結構框架」（中央研究院近代史研究所通訊）第三〇期、台北：中央研究院近代史研究所、二〇〇〇年九月、七三―八九頁。

② 拙訳「陳克『一九世紀末、天津民間組織と都市行政管理システム』」（『立命館法学』第二一〇号、一九九〇年二月、一七九―二一〇頁）。

③ 注①のほか、拙稿「一九九七年の歴史学界——回顧と展望——」（中国／近代）（『史学雑誌』第一〇七編第五号、山川出版社、一九九八年五月、二五二―二五九頁）、同「中国都市社会パラダイム・モデル構築にむけて——近年の日本における都市史研究からの考察——」（『比較日本文化研究』第五号、待兼山比較日本文化研究会、一九九八年二月、六五―八七頁）。

④ 拙稿「近代天津の都市コミュニティとナシヨナリズム」（西村成雄編『現代中国の構造変動 第三卷・ナシヨナリズム——歴史からの接近——』東京大学出版会、二〇〇〇年三月、一七五―二〇〇頁）。

（A5版 四二九頁 二〇〇二年二月 名古屋大学出版会 六五〇〇円）